

日本カメラ博物館 JCII ライブラリー
学芸員 宮崎真二

師岡宏次 (1914-1991) は、鈴木八郎写真研究所の助手を経て、1936年にアルスに入社し『カメラクラブ』の編集を担当しました。1941年の写真雑誌統合後は、引き続いて後継誌の『写真文化』を手がけましたが、同年に国際報道工芸へ移り、タイ向けの宣伝グラフ誌『カウパップ タウンオーク』(東亜画報)の編集に携わりました。戦後は商業写真の「東京フォト社」を設立したのち、1957年からフリーの写真家となりました。



『思い出の東京』



『銀座写真文化史』

『カメラクラブ』では、アルスの所在地に因んだ「大町節二」「神田十三」の筆名で特集記事を執筆しています。またこのころ、主にライカを使用して東京を中心とした風景、風俗を熱心に記録していました。これらの作品は後に『思い出の東京』(講談社・1972年)『思い出の銀座』(同・1973年)『思い出の武蔵野』(同・1976年)の3部作としてまとめられました。作品集としてはその後も『東京モダン 1930-1940』(朝日ソノラマ・1981年)、『銀座残像』(日本カメラ社・1982年)、『オールドカーのある風景』(二玄社・1984年)を著しています。

同時に、写真事情についての記述も数多く行っており、『日本カメラ』では「昭和初期銀座写真家地図」を1979年3月号から10月号まで連載し、翌年に『銀座写真文化史』(朝日ソノラマ)としてまとめました。また『カメラレビュー』では、2・26事件、東京大空襲など1930~40年代前半の事項と写真にまつわる話をテーマとした「カメラ事件帳」を24号(1982年7月)から30号(1983年7月)まで連載しました。

このほか戦争中に報道班員として徴用されることに備えて映画を勉強しておいたことで、1950年代後半からは8ミリ映画の分野でも活躍し、『8ミリ入門』(光画荘・1957年)、『8ミリ映画の知識』(朝日ソノラマ・1976年)、『8ミリ映画の写し方』(同・1977年)などの著作があります。

師岡は小型カメラであるライカの有用性にいち早く着目し、戦争中に写真用フィルムは枯渇してもニュースで使用される映画用フィルムはなくならないとの持論を保ったことで、終戦後すぐに撮影活動を行うことができました。また、「フィルムはなんでもあっても、カメラはなんでもあっても、私たちはとにかくシャッターを押すことが大切だと思う」(『思い出の東京』)と述べる言葉からは、時を超えても変わらない写真に対する情熱が伝わってきます。